

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

学術論文における効果的なイントロダクションの考察：社会科学，人文科学，自然科学分野の国際ジャーナルの検証

著者	中谷 安男
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	83
号	3
ページ	19-45
発行年	2016-02-26
URL	http://hdl.handle.net/10114/12045

学術論文における効果的なイントロダクションの考察：社会科学, 人文科学, 自然科学分野の国際ジャーナルの検証

中 谷 安 男

1. はじめに

大学の競争力を高める大きな要素は研究能力の向上である。この一つの指標は、在籍する研究者が競争的な国際ジャーナルに、いかに多く執筆しているかである（例 Del Saz Rubio, 2011）。特に、論文の引用件数であるインパクト・ファクター（Impact Factor）の高い学術雑誌への掲載が参考になる。このような状況において、大学教育でも学術論文執筆へ向けたアカデミック・ライティングを、早い段階から指導する重要性が認識されている（Jordan, 1997; Salager-Meyer, 1992）。

論文執筆や、国際ジャーナルへの掲載には様々な執筆のスキルや、読者を説得するストラテジーの構築が必要となる（Yang & Allison, 2003; 中谷, 2012a）。学術論文の中で重要な箇所は、読者の注意を喚起するAbstractと、研究目的や手法を明確にするイントロダクション（Introduction）の章と考えられている（Swales, 1990; 中谷・清水, 2010）。

Swales（2004）が述べているように、イントロダクションについては様々な考察が行われてきた。日本においても田路野ら（2007）が詳細な検証を行っている。これらの多くは、修辭的なストラテジーであるムーヴ（Move）が、いかに構成されているかを調査している。先行研究の成果に

より、この章の構成に関しては、一定の認識が確立されつつある。

大学におけるライティング教育においては、より実用的な書き方に関する考察が必要となる。しかしながら、具体的にいかなる表現を使い、イントロダクションの章を執筆するのかについて、明確なデータに基づいた議論が、これまであまり行われていない。本論ではこの点に注目し、実際の学術論文のデータを基にコーパスを構築し、分析した結果から具体的にどのようにイントロダクションを構築すべきかを考察を行う。

2. 研究の背景

ここでは先行研究を基に、イントロダクションの役割や構成、及び執筆する際の重要事項をまとめる。これらイントロダクションの章の執筆目的を達成するために必要となる、表現方法抽出の前提を確認する。

2.1 イントロダクションの役割

Swales (1990) は、イントロダクションの章の研究に大きな貢献をした。学術論文において、最初の部分であるイントロダクションは、ムーヴを確立し読者を引きつけなければならない(田地野 他, 2007)。様々なストラテジーが最も必要とされる章で、査読者がその論文を採択するかどうか大きな影響を与える。この完成度がジャーナルの編集者や査読者の評価を左右することになる。中谷 (2015) では、査読者は投稿された論文のイントロダクションを参考に、以下のような2つの評価項目で採択を決めることを明らかにした。

1. 研究が十分に新規的な内容で興味深いか
2. 研究課題は重要か、その内容を端的に述べているか

また著者により、イントロダクションを2つの部分に分けることがある。

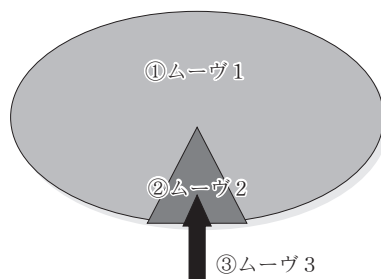
論文全体の設計図を示す部分と，詳細な先行研究の文献レビューを行う Literature Review である。前者は，全ての分野で必要だが，後者は人文科学系などで重要視される。ここは，論文を書くに至った経緯を示す，研究の背景であり，著者によっては Backgrounds として記載する。この部分は，自然科学系のジャーナルでは，それほど重きを置かれない。これは，特定の研究分野において短期間に多くの論文が掲載されるため，研究の背景は学者間で一定の共通認識が持たれているからである（中谷・清水，2010）

2.2 イントロダクションの構成

Swales（1990）は，各分野特有の書き方に注目するジャンル分析という観点から，イントロダクションのムーヴの構成に関する基礎的な考えを示した。Nwogu（1997）が主張するように，ここでは研究全体の概要を読者に分かりやすく示す。さらに論文の価値を訴え，内容をよく理解してもらう必要がある。このためには，特定のムーヴに沿って書くことの重要性が認識されている。イントロダクションのムーヴは，大きく分けると以下の3つが基本となる。図1はこれを概念的に示したものである。

- ①ムーヴ1：研究分野の定義と重要性の提示
- ②ムーヴ2：先行研究で未達成な課題の明示
- ③ムーヴ3：その課題への対処

図1 イントロダクションのムーヴ



具体的には、ムーヴ1では、書こうとしている論文はどの領域で、なぜそれが重要であるかを読者に訴える。先行研究を適切に活用し、代表的な研究として、これまでどのようなことが行われてきたかを述べる。また、最新の重要な研究なども引用して、書き手がその分野を十分に把握していることを示す必要がある。

ムーヴ2では、その論文で扱う課題の価値を訴える必要がある。これまでの研究で見過ごされている点や、不十分な点を明示したり、主張されてきたことに反対の意見を述べたりする。先行研究のテーマを継続する補足研究である旨を述べるものもある。このような書き手の主張の前提となるのは、研究領域の先行文献の詳細なレビューである。

査読者は、特にここに注目する。彼らはその分野の代表的な研究を十分に把握しており、ムーヴ2での執筆者の主張の正当性を適切に判断できる。

ムーヴ3において論文の目的を明確にすることになる。ムーヴ2で示した、先行研究の未達成の課題を、その論文がどのように解決するのか明らかにする。また、ムーヴ3の後半では、提示した課題に取り組んだ結果を示唆する場合もある。さらに、後続く章で、どのようにその課題の解決を提示するのか、論文の構成を伝えることもある。

2.3 研究の重要性のアピール

先行研究を基に、イントロダクションの3つのムーヴの目的について、査読者の観点から表1にまとめた。論文は研究報告を行うためのものであるが、国際ジャーナルの場合は、その価値を査読者に認めてもらわなければならない。つまり、豊富な研究経験を持つ、その分野の権威者に向けて書く必要がある。表1から分かるように、この部分は、論文の設計図となっている。このため、査読者はイントロダクションを読めば、しっかりとした研究計画に基づき書いた論文かどうか判断できる。

表1 イントロダクションのムーヴ構成と対策

ムーヴ	目 的	対 応	査読者の観点
1	<ul style="list-style-type: none"> 研究領域を定義 重要性を訴求 	主要な研究を引用 ブースターの活用	アカデミックメンバー の資格があるか
2	<ul style="list-style-type: none"> 研究ニッチの明示 検証されていない課題提示 	先行研究の問題を指摘	査読ポイント1 十分新規的な内容で興味深い
3	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果の価値の訴求 独自の研究課題 <hr/> (必要に応じて) <ul style="list-style-type: none"> 結果の示唆 論文の構成を提示 	課題の対処方法を明示 <hr/> 結果を予告 構成の順番を示す	査読ポイント2 研究課題は重要か，端的に述べているか

3. 研究

以上のように，先行研究では，学術論文のイントロダクションの目的や構成に関する検証が進んでいる。しかし，各ムーヴの詳細な執筆方法に関しては十分議論されているとは言えない。このため本研究は，社会科学，人文科学，自然科学のそれぞれ代表的な学術誌の研究論文のコーパス・データを基に具体的な表記方法を検証した。以下がデータと分析方法である。

3.1 コーパス・データ

自然科学，社会科学の経済・経営，人文科学の応用言語学から，それぞれインパクトファクターの高い代表的な学術誌を2つずつ選んだ。以下のような合計6つの学術誌である。*Science*, *Nature*, *International Economic Review*, *Journal of Management*, *Modern Language Journal*, *Language Learning*。

これら6誌の2006年より2011年に掲載された研究論文の中から，第一著者が英語ネイティブと思われる17本をそれぞれ選定した。全てを電子ジャーナルからダウンロードし，テキストファイルに変換した。この合計102本の論文による，総語数105万語のコーパス・データを作成した。この中のIntroductionとして明記している章，または明記されていない場合は，それと同等の最初の章の総計79,876語を抜き出した。

3.2 分析方法

作成した研究論文のイントロダクションの章のコーパス・データを，先行研究を基に，手動でムーヴ1から3に分類した。それぞれのムーヴごとにコーパス分析ソフトである*WordSmith 5.0*で特徴語彙を抽出した。これらを基に先行研究で示されている，記載すべき内容を確認し，論文テキストの中で具体的に，どのように使われているのか検証した。この中で比較的頻度の高い表現方法の具体例を見ながら考察していく。

4. 結果1：ムーヴ1の表現方法

学術論文は，著者の主張にできるだけ客観性を持たせなければならない。このために先行研究を効果的に引用し，内容の正当性や重要性を伝える必要がある。

4.1 先行研究の引用方法

引用には文中に入れる統合引用（integrated-citation）と，文末にまとめる非統合引用（non-integrated-citation）の2種類があり，それぞれの役割があった。以下の例を見ながら解説をしていく。

例1 Johnson (2008) recognizes the importance of qualitative data analysis in the field of motivation.

例2 The importance of qualitative data analysis in the field of motivation is identified (James, 2004).

例3 The importance of qualitative data analysis in the field of motivation has been identified (Hyland, 2011; White, 2007).

例1のように，統合引用を使う場合，その研究自体に焦点を当てていることになる。書き手が主観的に，自分の論文の中で重要な位置を占める研

究と考えて引用する。例1では、2008年にJohnsonが発表した、「動機付けの研究には質的な研究が重要だ」という成果を、書き手が論文で活用するということを示している。

例2のような非統合引用の場合は、記述した内容が一般に客観的な事実として認識されていると考え、その根拠となる研究として文末に記載される。この例文では、書き手が、「質的データの研究は重要な手法」を、事実として一般な認識があると見なしている。それを裏付ける証拠がJohnsonの2008年の研究成果ということになる。

例3の非統合引用には2つの研究が記載してある。複数の研究で提示されたということの意味し、より客観性が高くなる。例3は、より一般的な事実として認識されているという意味合いが強くなる。

4.2 時制の活用方法

表1で示したように、ムーヴ1の大切な役割は、研究領域を定義して、それに関連する自分の論文の重要性を訴求することである。このために、代表的な研究を複数引用し、大切だと認められている課題であることを示す。引用数が多ければ、それだけ客観性が増すことになる。

イントロダクションでは、書き手の研究のスタンスを予め明示する必要がある。つまり、自分の研究は、いかなる理論に沿ったもので、どのような概念を中心課題としているのか明確にする。これは一般に特定の時制を使うことで表す (Charles, 2006a, 2006b; Shaw, 1992)。ムーヴ1では、引用する先行研究を、スタンスを表わす時制のストラテジーと共に活用していた。以下が先行研究より明らかになったスタンスを表わす時制によるストラテジーである。(中谷, 2012b)

- ・ 現在時制は自分の主張やスタンスに近い
- ・ 過去時制は一過性でそれほど支持していない
- ・ 現在完了は前提や定説として客観性がある

4.2.1 現在時制

伝達動詞の現在時制は、引用した研究が書き手の論文の構築に中心的な役割を果たすことを意味する。自分の研究の基としている理論に関する研究や、その分野の代表的な研究成果で、これらは書いている論文の正当性を示すものに使われる。

次の例4では、Malcomが2006年に発表した、「2重課税の影響に関する証拠」を書き手が支持しており、論文でその成果に関連した議論を展開することを暗示している。ここで注目すべきは、発見したのは、2006年の時点なので、執筆している時は既に過去の出来事である。しかし、foundではなく、findsという現在時制を使っている。つまり、その発見を普遍的な事実として扱うスタンスを示しているのである。

例4 Malcom (2006) finds significant evidence for the impact of double taxation on cross-border acquisitions.

4.2.2 過去時制

過去時制で表すスタンスを、以下のような例文で確認してみる。

例5 The importance of qualitative data analysis in the field of motivation was identified (Johnson, 2008) .

例6 Johnson (2008) identified the importance of qualitative data analysis in the field of motivation.

例5では、動機付け研究領域において、質的なデータ分析を行う研究が重要視された時期が、2008年にあったことを表わしている。過去のある時点での研究分野の経緯を示しているだけで、書き手はその主張を特に支持しているわけではない。例6では、Johnsonが2008年に、「質的なデータ分析研究が重要だ」と確認したことが中心の話題となる。過去時制を使い、自分のスタンスと距離があることを暗示している。書き手は、必ずしもこの研究を支持してはいないことになる。後に続く文には、例えば質的な研

究とは対照的な量的な分析の必要性など，別の観点を導入することが考えられる。

4.2.3 現在完了

現在完了は，過去のある時点で誰かが提示し，現時点でもそれが有効だと書き手が考える場合に使われていた。このため現在完了は，複数の研究の引用と共に使われる傾向があった。複数の研究が支持しているということで，引用した内容が客観的で，より普遍性があるという主張になる。

例 7 A lot of research has recognized the importance of qualitative data analysis for motivation (e.g. Johnson, 2008; Young, 2010).

例 8 Numerous studies such as Johnson (2008) have recognized the importance of qualitative data analysis for motivation.

例 7 は，質的研究の重要性が一般に確立された事実の裏付けとして，複数の研究を文末に記載している。例 8 の場合は，これまでの多くの研究の中でも，特に Johnson (2008) が書き手の主張を裏付ける研究と見なしているという意図になる。

以上のように，イントロダクションのムーヴ 1 では，特定の時制と共に研究を引用し，読者に自分のスタンスを示していた。

4.3 ブースター表現の活用

研究の重要性などを強調する際は，ブースター (Booster) と呼ばれるメタディスコースが使われていた。以下の 3 つがポイントとなり，(1) と，(2) または (3) を合わせて活用する。

- (1) ブースターによる強調
- (2) 現在時制と統合引用によるスタンスの明示
- (3) 現在完了と非統合引用による客観性の明示

ブースターはポジティブな意味を持つ語句や、強調する表現を使い、読者の注意を喚起するメタディスコースである (Hyland & Tse, 2004)。強調のポイントは、A 範囲の広さ、B 数の多さ、C 期間の長さ、D 新規性、E ポジティブさの 5 つとなっていた。それぞれ、よく使われていた例を以下に示す。文末に非統合引用を使い、適切な先行研究を複数記載すると、より客観性を表現できると考えられる。

A 範囲の広さ

広く認められている研究領域は、現在時制で使われると、書き手の強いスタンスを示すことになる。以下がコーパスで抽出された代表的な表現である。

It is widely believed that...	広く信じられている
Is generally assumed that...	一般に確信されている
It is well known that...	よく知られている
これらの表現は (3) の現在完了で使うと、客観性が高まる。	
It has been generally acknowledged that...	広く認識されている

B 数の多さ

研究の数が多ければ、それだけ重要と考える研究者が多いことになる。この研究数の強調には以下の表現が使われていた。

A number of studies have been conducted...	研究が多数行われている
Many researchers have argued that...	研究者が多数議論している

C 期間の長さ

長い間に渡り研究が行われていることは、そのテーマの普遍性を意味する。コーパスでは次のような例が抽出された。

There is a long tradition of research within...	長い伝統がある
...research has long been recognized that...	長期間認識されている

...studies over several decades have shown that... 数十年示唆がある

D 新規性

最新の研究領域は，現時点で重要視されている研究テーマということになる。このことを強調する代表的なものが以下の例であった。

Current theory suggests that...	最新の理論が示唆している
Recent research trends towards...	最新の研究の傾向では
Researchers have recently considered	研究者が最新と考えている

E ポジティブさ

研究の重要性をポジティブな表現で強調する場合に次の例があった。

There is compelling evidence that...	説得力のある証拠がある
...is no longer open to doubt...	疑いの余地がない
A central concern in the study of...	研究の中心的関心事である
...has been an essential part of...	必須の分野である
...have been extremely successful...	とても成功している
...has a profound impact on	重大なインパクトがある

例 9 の More recently は D の新規性を表わすブースターで，DNA の 2 重らせん構造の順序の解明が，より最新の重要な事象あることを示唆している。また，profound impact は E のポジティブさを表現するブースターで，研究や医学に重大な影響を与えていることを伝えている。

例 9 More recently, parallel DNA sequencing has had a profound impact on research and medicine (Roger, 2012; Smith, 2014) .

ムーヴ 1 の最初の文において，このように幾つかのブースターを組み合わせれば，論文で扱う課題の研究分野における重要性を読者に訴えることができる。また，この分野の代表的な研究を 2 つ記載し，現在完了形を使

うことで、主張の客観性を示している。書き手がしっかりと文献のレビューをしていることを、編集者や査読者に伝えることになる。

5. 結果2：ムーヴ2の表現方法

イントロダクションのムーヴ1に続くムーヴ2において、いかに研究課題が効果的に提示されていたのかを検証する。ここでは研究の独自性や目的を明確にして読者を引きつける必要がある。一つの方略として、先行研究を引用し、その不十分な課題や問題点を提示し、これまで誰も取り組んでいない研究テーマであることを明確にする。こうすれば、書き手の研究の独自性を示すことになる。これは研究のニッチ (nishe) を確立すると定義されている (Swales, 1990)。

5.1 研究のニッチの記述法

ニッチの確立が論文の価値を読者にアピールする最も大切な要素となる。基本的な方法は、先行研究に問題点があることを示す表現を使う。また、書き手のスタンスを表わす時制を組み合わせるニッチを提示する (Koutsantoni, 2004)。さらに、ヘッジを使い、レビューの限界を示唆したり、他の研究者へ配慮したりしていた。

5.1.1 ネガティブな表現で問題点を明示

これは、ムーヴ2で反意的・否定的な表現を使い、引用した先行研究に限界があることを読者に伝える。そこがニッチであり、書き手の論文で中心となることを示唆するのである。これには主に3つの用法があった。

A 否定的数量詞や否定形

先行研究で課題が取り扱われていないことを強調する時に、以下のような表現が使われる。

no, none, not, little, few, only

具体例として次のようなものがある。

There is little research... (…の研究はほとんどない)

B ネガティブな動詞，名詞，形容詞

先行研究で取り扱われている課題に問題がある場合に，次のような表現が使われていた。

動詞 fail, lack, suffer from

名詞 failure, limitation, uncertainty

形容詞 limited, questionable

具体例は以下のような表現である。

The previous studies suffer from several limitations...

(先行研究は幾つかの制限を抱えている)

C メタディスコースの反意的接合表現

文頭のメタディスコースを反意的接合表現で始めると，そこからが書き手のニッチであることを読者に明示できる。コーパスでは，単文でニッチを表現するHoweverが最も多く使われていた。次に複文の形をとるAlthoughが多く抽出された。他には，Nevertheless やDespite, Yetも多少使われていた。

・単文の場合 However, Nevertheless, Yet, Despite

・複文の場合 Although

以下が具体例である。

However, few studies examined...

(しかしながら，…を検証した研究はほとんどない)

Although scholars have admitted..., less is known about...

(…を学者は認めてはいるが，…はほとんど知られていない)

多くの場合、これらネガティブな表現 A, B, C の 3 つのタイプのいずれかを組み合わせて、次の例10のようにニッチを確立していた。

例10 However, this calculation has large uncertainties because of the complex tectonics in the North Atlantic Ocean.

(だが, 北大西洋の地質学的な複雑さから計算には不確かさがある。)

5.1.2 書き手のスタンスを表す時制の活用

ムーヴ2では時制を使い分け、引用した研究に対して書き手の主張との距離を暗示していた。過去時制は、自分の見解と一致するものではないことの示唆となる。現在完了では、先行研究が不十分であることを示す。現在時制は、書き手のスタンスと違うことを際立たせる。また複文を使い、幾つかの時制を組み合わせてニッチを提示する例もあった。

A 過去時制

McGrath & Kuteeva (2012) の主張のように、過去時制の使用で、引用研究は書き手のスタンスと距離があることを例11のように暗示していた。

例11 However, their main concern was to focus on speakers' metacognitive strategy usage. They did not pay attention to the interactional aspects of communication.

(だが, 彼らの主な関心事は、話者のメタ認知ストラテジーに注目することだった。彼らはコミュニケーションの対話には注目しなかった)

B 現在完了

現在完了形を使い、これまでの研究で見過ごされていることを指摘しているのが次のような例である。

例12 Only a few attempts have been made to explain such cases.

(そのようなケースの説明の試みは、ほんのわずかしか行われていない)

C 現在時制

特定の課題を明示する際に，例13のような用法が使われていた。

例13 There is no study which uses this method to collect authentic data.

(実際のデータの収集に，この手法を使った研究はない)

D 複文での時制の組み合わせ

前節で現在完了を使い重要な課題であることを示し，後節の現在時制でその課題のニッチを示唆する。例14がその例である。

例14 Although authors have admitted the importance of learners' strategy use, little research explores its effect by using multiple data sets.

(方略使用の重要性を認めているが，複数データで調査しているものはほとんどない)

5.1.3 ヘッジの使用

ニッチを確立する時に気をつけないといけないのは，査読者が該当分野に詳しい専門家という点である。この際，緩衝表現のヘッジ (Hedge) を使い，主張を防御することができる。前もって先行研究のレビューが完璧でない可能性を示唆しておくのである。このように，主張を弱めておく方が無難な場合に，次のような表現例がある。

There seems to be little research...

(ほとんど研究がないように思われる)

Their study may suffer from the limitation of lack of generalizability...

(一般化困難な制限を抱えているかもしれない)

5.2 先行研究からニッチを書く観点

ニッチでは，主に5つの観点で先行研究の問題点を指摘する方法があった。A サンプル，B 実験などの条件，C 実験タスクとデータの収集方法，

D分析の方法，E理論やモデルに基づく解釈である。このような課題を示した後，執筆者がそれをテーマとして研究を進めることを記載していく。

以下に詳しく5つのニッチの書き方を示す。ニッチの後に研究課題の示唆も記載する。

A サンプル

サンプルとは，被験者であったり，物質であったり，何かの負荷をかけられて，変化を起こすものである。例えば，米国の企業で行われているマーケティング手法が，日本の企業で有効か調査するというような手法である。例15では，日本の化粧品業界で有効かどうか研究されていないことをニッチとしていた。

例15 However, there is little research which investigates whether this marketing approach can be effective for the Japanese cosmetics industry.
(しかし，このマーケティングの手法が，日本の化粧品業界で有効か調査した研究はほとんどない) 示唆：日本の化粧品業界で調査する

B 実験などの条件

実験や調査の時期や，費やす時間，または回数を変えニッチを確立する方法である。例16では実験の期間が一度しかないことを課題としている。

例16 However, since their static analysis only has one period, workers and vacancies have only one chance to match.
(彼らの静的な分析は，1つの期間しか取り扱っていないので，労働者と欠員は，一回しか当てはまらない) 示唆：長い期間の調査をする

C 実験タスクとデータの収集方法

これは事象の変化を測定する際に，使用するデータの種類によりニッチを構築する方法である。例えば，外国語教育の成果を問う場合，テストの結果，実際の発話，意識の変化，アンケートの結果など様々なデータが考

えられる。これらのデータ収集方法の選択は，行う実験のタスクによって大きく左右される。例17は，コンピュータによるデータの収集がない点に注目している。

例17 Although a number of more flexible specifications have been proposed, few proved to be computationally tractable.

（より柔軟性のある特定化が多く提案されているが，コンピュータで加工できるようなものはほとんどない）示唆：コンピュータで解析する

D 分析の方法

実験などの成果を，先行研究とは異なる分析手法で検証することが考えられる。例えば，動機付けの変化を調べる場合に，質問紙で収集した結果の統計分析に，因子分析や，判別分析，重回帰分析など様々な分析方法がある。また，科学の実験などでは，試薬を変えるなども考えられる。例18は，横断的に判断する分析方法がないことに注目している。

例18 However, there has been little attention to the potential for cross-level judgment analyses.

（しかしながら，レベル横断的な判断の分析にはあまり注意が払われてこなかった）示唆：レベル横断的な検証をする

E 理論やモデルに基づく解釈

今まで定説と考えられてきた理論やモデルではなく，別のモデルなどの利用を提案し，研究の成果などを解釈することもできる。次の例は，特定の理論モデルが長期的な観察に向いていないことを指摘している。

例19 However, versions of these models suffer from intractability problems — tracking the distribution of wealth over time is difficult.

（しかしながら，これらのモデルは困難な問題を抱えている—長期に渡る富の分配を追跡するのが困難である）示唆：追跡できるモデルを使う

6. 結果3：ムーヴ3の表現方法

イントロダクションのムーヴ3は、ムーヴ2で示したニッチの課題を、論文でどのように解決していくのか明らかにする箇所である。このムーヴには、表1で示したように、主に次の3つの目的がある。

- 1 研究の価値の訴求：ムーヴ2で指摘した課題の対処方法
- 2 結果の示唆：主な研究結果を事前に提示
- 3 論文の構成を提示：後に続く論文の構成の予告

1はどの論文にも必須だが、2及び3は論文により異なっていた。

6.1 研究の価値の訴求

研究の価値の訴求は、ムーヴ3の最初の文に書く場合が多かった。提示したニッチに対して、書き手がその課題にいかに取り組むか明確にする所である。これまでの研究で取り扱われていないテーマであるため、独自性があり、読者に価値があることを訴える。書き手自身のスタンスなので、時制は現在形を使い、重要性を述べるが多かった。これから読んでもらう論文における、具体的な課題への対処方法を明示する目的がある。

書き出しの基本は、「ここからが、自分の研究の独自性」、と読者に明示する。このためのメタディスコースが最初の文頭に使われる。各研究分野のジャンルで使われる表現に一定の傾向があった。

例20のメタディスコース Here we は、自然科学分野の代表的ジャーナルの *Nature* や *Science* のコーパスで多く使われていた。一方、この表現は、社会科学や人文科学では使用が極めて少なかった。Here we の後に続く動詞は、幾つか選択できる。代表的なものを例20に記載する。例21では、先行研究とは異なる観察方法を用いることを伝えている。

		選択できる動詞		意味
例20	Here we	present	...ここでは、我々は...を	示す
		report		報告する
		perform		実践する
		use		使う
		consider		考慮する

例21 Here we use a range of recent observations of stratospheric water vapor.

(ここでは、我々は成層圏の水蒸気の最近の様々な観察法を使う)

社会科学分野では、次の例22の表現がよく使われ、動詞の所は、例20と同じであった。

		選択できる名詞		選択できる動詞	意味
例22	In this	article	we	present	この論文で我々は...
		paper		report	
		study		⋮	この研究で我々は...
				⋮	
		work		⋮	

社会科学系では、例23のようにIn this articleが最も多く使われていた。この例では、既存の研究における賃金の拡散に関する説明が十分でないため、別の説明を試みることを伝えている。

例23 In this article we consider an alternative explanation for wage dispersion.

以下は、書き手を示すweではなく無生物主語を使う例である。

	選択できる動詞	意味
This study	examine (s)	検証する
The present study	investigate (s)	調査する
The purpose of this article is to	explore (s)	探究する
	endeavor (s)	〃

例24では、これまでの研究で十分でなかったモデルを構築し、それを識別できるようにすることを述べている。

例24 The purpose of this article is to explore the formulation and identification of such models.

(この論文の目的は、そのようなモデルの形成と識別である)

6.2 書き出しに続く文：具体的な対処法を示す

ムーヴ3の書き出しの文で研究成果の価値を訴求した後に、それをいかに達成するか書く必要がある。この後にサポート文を続け、具体的な対策を示す。書き出し文をサポートし、対処の詳細な内容を表す以下のような表現が使用されていた。

To demonstrate this point...	この点を実証するために
To do this...	これを実行するために
To achieve this goal...	この目的を達成するために
By testing...	試験を行うことによって
By combining...	組み合わせることによって

例25は、学習者のストラテジーを意識化するトレーニングの成果の調査を行うという論文のディスコースである。これを具体的に達成するために、様々な評価方法を組み合わせると述べていた。

例25 This study investigates the effect of awareness-raising training on learners' strategy use for interaction. To achieve this goal, we combine

several assessment methods such as analysis of learners' transcription data, retrospective verbal reports, and conversation test scores.

(この研究では、対話での学習者の意識付け効果を調査する。この目的を達成するため、学習者発話の文章化データや、振り返り法の口頭報告や、テストスコアなどの複数の評価方法を統合する)

このように、ムーヴ3をより詳しく書けば、論文の独自性が強調される。下のようなメタディスコースを活用し、課題を示す一般的な内容から、特定の対処法を示し、ムーヴ3の目的を明確にしていた。

This study investigates	: 独自の研究課題	一般
↓		↓
To achieve this goal	: 具体的対処法	特定

6.3 結果の示唆の記述

表1で示したように、結果の示唆が全ての論文に書かれるわけではなかった。これがあれば、イントロダクションの章で、結果を事前に示唆することになり、読者に興味を持たせる効果もある。しかし、収集した研究論文コーパスでは、イントロダクションでの結果の予告は、どの分野も多くなかった。以下のような、結果関連のメタディスコースが使われていた。

The results show...	結果は…を示している
The results indicate...	結果は…を示唆している
Results support the following conclusions...	以下の結論を指示する
Our conclusions...	我々の結論は
We confirm that...	我々は…確認します

ここでは、ヘッジが使われることもあった。まだ十分な議論をしていな

い段階で、読者に断定的に研究成果を述べることは難しいのが、その理由である。

例26ではindicate を使い、断言ではなく「示唆される」としており、結果自体もヘッジのcouldで「可能性」にとどめている。

例26 The results of multiple data analysis indicate that the use of specific strategies for interaction could improve EFL learners' oral proficiency.
(複合的なデータ分析の結果、対話中に特定のストラテジーを使うことで、学習者の発話能力を向上することができる可能性が示される)

6.4 論文の構成の記述

イントロダクションのムーヴ3で、論文全体の構成提示は、社会科学系で多くみられた。具体的には次のような構成の順番を明示していた。

- This paper consists of the following three sections:
First... Second... Finally... (3つのセクションで構成されている)
- This paper is divided into two sections. *The first phase* of the study aims... , *The second phase...* (2つの部分に分けている)
- This article is organized into three main parts. *The first part...*
In the second part,..., *Finally, /the third part,...*
(3つの主要な部分で構成されている)

論文構成の記述は、続く内容の構成を読者に意識化させ、読みやすさを向上させるストラテジーである。例27は、最初に構成の明示することを述べている。続いて、論文の順番であるSection 2, 3, 4というメタディスコースを活用し、短く内容を記載している。

例27 The rest of the paper is organized as follows. Section 2 discusses the usefulness of the general means as income standards and identifies the range of low income standards. Section 3 presents our empirical

evidence, and Section 4 presents our conclusions.

(以下のような論文構成である。2章は所得基準の一般化手法の便利さ，低所得の範囲の確認。3章は実験結果を示し，4章で結論を述べる)

7 結論

以上の結果を要約したのが表2である。各ムーヴの主な目的と活用するストラテジーをまとめている。

これまでアカデミック・ライティングの分野では様々な研究が行われ，イントロダクションの重要性が主張されてきた。また，大まかなムーヴの構成についても多くの調査が行われてきた。しかし，この章のそれぞれのムーヴにおける具体的な表現方法について，詳細に報告した先行研究はほとんどない。この点に注目し，本論では社会科学，人文科学，自然科学の代表的な学術論文のコーパスを活用し検証を行った。この結果に基づき詳細な表現方法をまとめた。

イントロダクションの章の完成度が，論文の採択に大きな影響を与えると考えられている。このため，本論で示したような結果を実際の執筆指導で活用する意義があると考える。今後は，他の章である Method, Result,

表2 イン트로ダクションのムーヴの目的とストラテジー

ムーヴ	目 的	ストラテジー
ムーヴ1	研究領域を定義し課題の重要性をアピール	<ul style="list-style-type: none"> 引用と時制スタンス ブースター
	↓	
ムーヴ2	研究されていないニッチを明示	<ul style="list-style-type: none"> ネガティブ表現 時制スタンス ヘッジ
	↓	
ムーヴ3	独自の課題を示し論文の価値を訴求 (必要に応じて) 結果の示唆 論文の構成	<ul style="list-style-type: none"> メタディスコース 課題の対処を明示 メタディスコース メタディスコース

Discussion や Conclusion についても、同様のアプローチで表現法を明示していく必要がある。また、ここで示した書き方を基に、いかに具体的な学習プログラムを構築するか議論を行うことは重要な課題である。

日本の大学の国際競争力が芳しくないのは、決して研究力が低いわけではない。最終の仕上げである、英語による研究論文の執筆への対応が十分でないと思われる。これらを解決していくためにも、本論のような研究の価値もあると思われる。

〈参考文献〉

- Biber, D., Conrad, S., and Leech, G. (2002) *Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Charles, M. (2006a) Phraseological Patterns in Reporting Clauses Used in Citation: A Corpus-based Study of Theses in Two Disciplines. *English for Specific Purposes*, 25, 310–331.
- Charles, M. (2006b) The Construction of Stance in Reporting Clauses: A Crossdisciplinary Study of Theses. *Applied Linguistics*, 27, 492–518.
- Del Saz Rubio, M. M. (2011) A pragmatic Approach to the Macro-structure and Metadiscoursal Features of Research Article Introductions in the Field of Agricultural Sciences. *English for Specific Purposes*, 30, 258–271.
- Hyland, K. & Tse, P. (2004) Metadiscourse in Academic Writing: A Reappraisal. *Applied Linguistics*, 25-2, 156–177.
- Jordan, R. R. (1997) *English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koutsantoni, D. (2004) Attitude, Certainty and Allusions to Common Knowledge in Scientific Research Articles. *Journal of English for Academic Purposes*, 3, 163–182.
- McGrath, L. & Kuteeva, M. (2012) Stance and Engagement in Pure Mathematics Research Articles: Linking Discourse Features to Disciplinary Practices. *English for Specific Purposes*, 31, 161–173.
- 中谷安男 (2012a) 「アカデミック・ライティングにおけるディスコース・ストラテジー」『法政大学多摩論集』28号：27–43.
- 中谷安男 (2012b) 「アカデミック・ライティングにおける研究者のスタンス：研究論文のIntroductionにおける伝達動詞の時制の検証」『英語コーパス研究』第19号：15–29.
- 中谷安男 (2013) 「アカデミック・ライティングにおけるModal Verb使用の検証ー学術論文のIntroductionとConclusionの比較」『英語コーパス研究』第20号：1–14.
- 中谷安男 (2015) 「社会科学，自然科学，人文科学分野の国際ジャーナルにおける効果的なアカデミック・ライティングの検証」『経済志林』83巻1号：39–59.
- 中谷安男・清水眞 (2010) 「アカデミックコーパスのディスコース・ストラテジーの初期的検証：物理化学論文のAbstractにおけるMove 分析」『英語コーパス研究』第17号：17–32.

- 中谷安男・土方裕子・清水眞（2011）「アカデミックコーパスにおけるCoherence構築のストラテジー：ScienceのDiscussionにおけるInformation Orderの検証」『英語コーパス研究』第18号：1-16.
- Nwogu, K. N. (1997) The Medical Research Paper: Structure and Function. *English for Specific Purposes*, 16-2, 119-138.
- Salager-Meyer, F. (1992) A Text-type and Move Analysis Study of Verb Tense and Modality Distribution in Medical English Abstracts. *English for Specific Purposes*, 11, 93-113.
- Shaw, P. (1992) Reasons for the Correlation of Voice, Tense, and Sentence Function in Reporting Verbs. *Applied Linguistics*, 13, 302-319.
- Swales, J. M. (1990) *Genre Analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Swales, J. M. (2004) *Research Genre*. New York: Cambridge University Press.
- 田地野彰・寺内一・金丸敏幸・マスワナ紗矢子・山田浩（2007）「英語学術論文執筆のための教材開発に向けて：論文コーパスの構築と応用」『京都大学高等教育研究』14号：111-121.

How to Write a Persuasive ‘Introduction’ in Academic Writing: An Analysis of International Journals in the Social, Human and Natural Sciences

Yasuo NAKATANI

《Abstract》

This paper investigates how persuasive ‘Introductions’ are developed in research articles that are published in competitive journals. A considerable number of studies have been conducted on the rhetorical strategy of *move analysis*. However, only a few attempts have been made to describe in detail the vocabulary and phrases used in individual moves. This study conducts a qualitative investigation of a representative group of 102 research papers in the social, human, and natural sciences. The results of this corpus data analysis indicate that there are specific ways to develop persuasive discourse in each move, which could enhance effective negotiation with academic authorities.